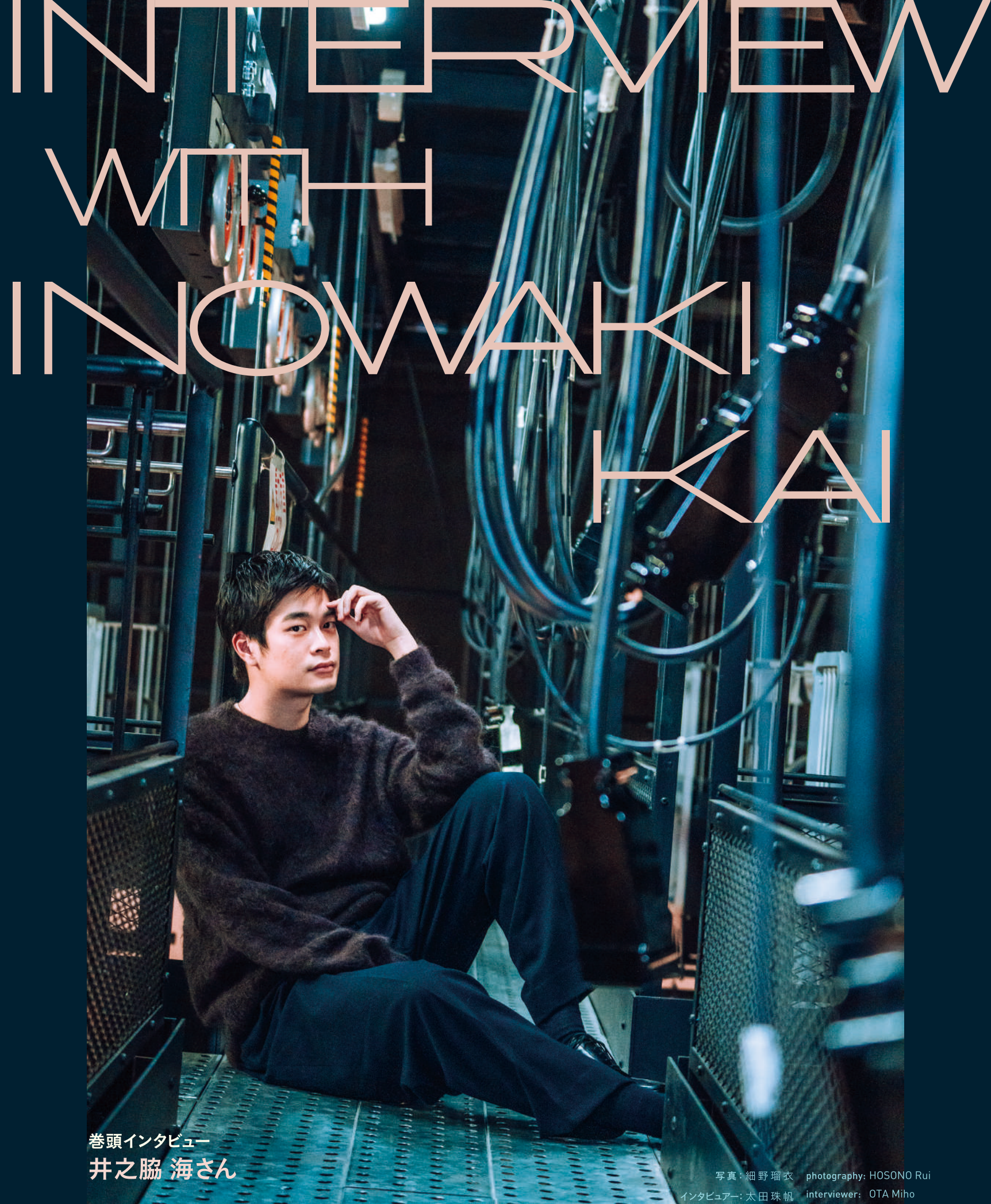


ART050 CAMPUS

PHOTOGRAPHY
CINEMA
FINE ARTS
MUSIC
LITERARY ARTS
THEATRE
BROADCASTING
DESIGN





巻頭インタビュー
井之脇 海さん

「映画は皆で作るもの」——日藝はそれが分かる場所

写真：細野 瑠衣 photography: HOSONO Rui
インタビューア：太田 珠帆 interviewer: OTA Miho
鶴岡千穂 TSURUOKA Chiho
中川 芽衣 NAKAGAWA Mei
山口 可奈 YAMAGUCHI Kana



学生時代に会った印象深い
人はいますか

当時監督コースの学生だった小林大輝くんですね。彼はものすごく不器用な人で、彼と初めて会った人はまず友達になりたがらない、そんなタイプです。僕も1年生の時は、彼とほとんど話したことがありませんでした。2年生になったある日、僕が友人と本の話をしていたら、急に彼が「俺もその本好き」って話に割って入ってきたんです。お互いに共通の好きなものがあると、なんだかそれだけで仲良くなれるような気がするんですが、それから映画の話もしたり、いっしょに映画を見に行くようになり、最終的には江古田の居酒屋を二人で巡るほどの仲になっていましたね。

彼は不器用なんですけど、周りの皆が助けてあげたいと思うような、映画への真っ直ぐさを持っていたんです。2年生の実習の時なんですけど、6人の監督がそれぞれ1シーンずつ撮っていく形式だったんですね。その日は小林

くんのシーンを撮影する日だったんですが、監督が居ないと撮影できないのに、なんと小林くんは寝坊してきてた(笑)。そんなの、ダメじゃないですか。でも彼は「ごめんなさい」って謝ったあとに「僕のせいで時間がなくなってしまったけど、でも僕はこれを撮りたいんです!」って。じゃあ、最初からちゃんと時間通りに来いよって話なんですけど(笑)。でもその流れで撮ったシーンが、すごく良い出来だったんですよ。それに完成した作品を観たときに彼の映画にける想いがすごく伝わってきた。3年生の実習で小林くんに声をかけてもらった時、この人とならどんなイレギュラーなことがあっても面白い作品が作れるかもしれないと思って、共に作品を作ることを決めました。その映画への真っ直ぐな想いは僕には無いようなもので、羨ましいなと思っていましたね。彼の撮る世界は本当に素敵で、卒業後に作った『スリップシティ』が賞にノミネートされたこともありますし。今後一緒に映画界を担っていけたらなって思う仲間です。

井之脇さんにとって、
日藝はどんな場所ですか

親みたいな場所ですね。俳優の仕事って、現場で実際に動いたり、先輩と話して学ぶ機会は多くある一方で、授業のようにノウハウをしっかりと教わる機会は少ないような気がして。だから日藝は、子供の頃にご飯の食べ方や歩き方を教わるのと似たような感じで、作品の作り方や歴史といった映画の基礎の部分から教えてくれた場所です。宮澤先生が今でも僕が出演している作品を観た後に電話をかけてきてくれて、愛のあるダメ出しを頂いたりします(笑)。そういう意味でも、親のような、見守ってくれる存在のように感じます。



それいけ！研究室



在校生のみなさん

影響を受けた映画作品はありますか

レオス・カラックスの『パンヌフの恋人』です。初めて観たのは、16とか17歳ぐらいの時ですね。僕の知らない世界が詰まっていて、この作品がきっかけで映画にのめり込んでいきました。あと大学1年生の時、演技コースの友達と一緒にカラックスのオールナイト上映を観に行ったことがあって。そういう意味でも、思い出深い作品ですね。

在校生へに向けてメッセージをお願いします

学科ごとに固まらず、学科の垣根を越えていろんな人と話をしてください。これは僕が出来なかったことからこそ、やって欲しいなって思いますね。僕も学生時代ずっと映画学科の中ばかりに居たんですけど、卒業してからできた美術が好きな友達にいろんな美術展に連れていってもらっているんです。せっかく日藝には8学科あるので、そういった経験を学生の時にしたいなって思います。 （構成：太田）

学科の壁をこえて

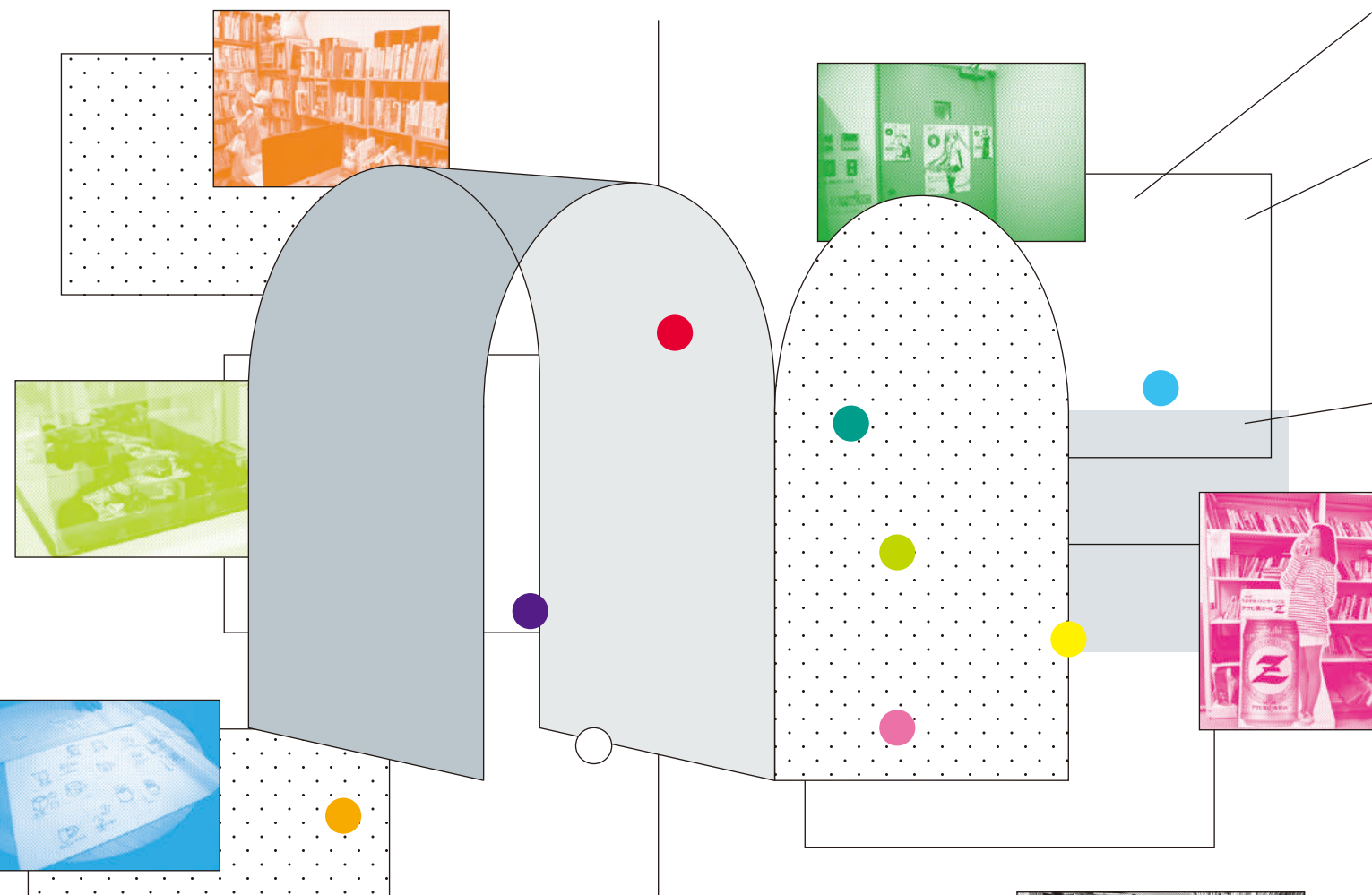
楽しんで下さい!!

井之脇 海
2023.1.17

Profile

井之脇 海 [いのわき・かい]

1995年11月24日生まれ、神奈川県出身。2018年日本大学芸術学部映画学科卒業。2007年、映画『夕凧の街 桜の国』でデビュー。『トウキョウソナタ』で第82回キネマ旬報ベスト・テン新人男優賞、第23回高崎映画祭最優秀新人俳優賞を受賞し注目を集める。以降テレビでは連続テレビ小説「ちむどんどん」「ひよっこ」「ごちそうさん」、大河ドラマ「おんな城主 直虎」「いだてん～東京オリムピック噺～」、「クロサギ」「失恋めし」「俺の家の話」「義母と娘のブルース」「伝説のお母さん」「教場」「ハルとアオのお弁当箱」「青と僕」など、映画では「犬も食わねどチャーリーは笑う」「猫は逃げた」「ザ・ファブル」「ミュージコフィリア」「ONODA 一万夜を越えて」「サイレント・トーキョー」「砕け散るところを見せてあげる」など出演多数



Zoomの向こう側

現役生でも意外と知らない先生の研究室。そこで今回は8学科＋芸術教養の9人の先生の研究室におじゃましました！
新入生も在校生も、どんな先生がどんな研究室にいるのか覗いてみませんか？



写真学科 田中里実先生



【先生の研究室のこだわり】

アメリカのカメラメーカーの「ベイビーディアドルフ」という大型フィルムカメラの中でも小さめのフィルムカメラが好きです。専門家の人たちから少し使いにくいという評判のカメラですが、逆にこの使いにくさが面白く、とても気に入っています。

【先生の研究】

主に「19世紀の初期写真技法」について研究しています。授業ではその19世紀初期写真技法を用いて手作りすることで写真の原点を体験します。自分自身が写真に興味を持ったのは30代半ばからで、大学に入学したのは40代近くでした。

【オンライン授業について】

写真技術Ⅲ(特殊技法)では、「手作り」を中心とした実習授業だったので、最初は非常に苦労しました。そんな中観た料理番組に影響を受け、授業も料理番組の生放送みたいなイメージで行いました。カメラを3台固定して、薬品の種類はこんなのですよ、塗る時はこうやるんですよ、というような形です。あの時料理番組を観ていなかったら全然違う形になっていたかもしれません。

演劇学科 中野成樹先生



【先生の研究室のこだわり】

これまで「実際の舞台上で使い終わった小道具」などがどんどん溜まっています。「こだわりの一品」や収集しているものは特にないけれど、思い出の品は沢山あります！

【先生の研究】

専門は舞台演出です。中でも「小劇場」と言われるジャンルを研究しています。

【オンライン授業について】

演出論という授業が、オンデマンド授業です。できるだけ「雑談」を多くしたいと思っています。オンライン授業に限らず、講義の醍醐味はそこにあると思うので、講義ノートの配布よりも音声重視しています。対面授業になっても、雑談!したいと思います。

映画学科 野村建太先生



【先生の研究室のこだわり】

研究室を引っ越して一番いい部屋をもらってしまいました。DVDは沢山そろえてありますが、中でも「カメラを持った男」という作品がお気に入りです。卒業生が撮った映画作品やポスターも置いてあります。

【先生の研究】

元々は「実験映像」という物語性のない映画を作っていました。しかし専任教員でアニメーションを教える先生がいなかったため、そこから勉強することになりました。映画学科ではアニメを学ぶ学生も多くいますね。

【オンライン授業について】

実習系は対面、座学はオンラインでした。オンラインの時は立ってZoomに向き合っていましたね。マスクを外して話すので、毎日きちんと髭をそっていましたよ。撮影コースだと、カメラを受講生の家に郵送して、撮影してもらっている授業もありました。大変だったのは映画上映です。著作権の問題などがあるので、受講生にどの配信サービスに入会しているか聞いたりしていました。

音楽学科 小林純生先生



【先生の研究室のこだわり】

本棚。色々な音楽分野を教えるようにしているため、他の大学にはないであろう、「貴重な洋書や初音ミクなどのVOCALOIDのパッケージ」もあります。本棚の品揃えは割と自信あり。

【先生の研究】

純芸術(現代音楽)や商業音楽(映画音楽)やボカロ楽曲などを幅広くやっています。

【オンライン授業について】

作曲の授業を行う時に、画面共有などのZoomの機能を最大限活かして、対面授業より効率的に生徒達に教えるようにしました。一緒に速度と一緒に楽譜を見て授業を進めるため、学生も理解がより深まったと思います。

美術学科

瀬島匠先生



【先生の研究室のこだわり】

特にこれ!といったこだわりはないが、これまでの仕事で作った作品や卒業生や非常勤の先生方の作品を飾っています。写真は学生が自由課題として制作した「エビのリュック」で、ここに置いたまま卒業してしまいました。

【先生の研究】

立体物も作るとし、絵も描いています。「頼まれたら何でも」作り上げるのが仕事。過去にはディズニーシーで仕事をしたこともあります。

【オンライン授業について】

教科書の中身を読んで終わりだけではなく、色々な経験を生徒に話しています。また、ゼミではFacebookやLINEを使用して指導をします。学生には自分の俯瞰・想像力を鍛えるために先生方の話を沢山聞いて、引き出せるものは引き出してほしいです。

デザイン学科 片桐祥太先生



【先生の研究室のこだわり】

DIYをして空間をアレンジしているところがポイントです。机の位置を動かし、照明を付け替え、ハンモックを取り付けて居心地が良いように模様替えをしました。

【先生の研究】

頭のなかにあるものや議論の流れをイラストや図表にして「可視化」することで、新しい意味やアイデアを生み出す方法を研究しています。

【オンライン授業について】

オンライン上でもフィジカルな体験が出来るように「Miro」というサービスを使ってRPGのような授業を行っていました。授業の過程や目標地点を俯瞰できるマップを作り、チームを組んで学び合いながら4つのアイテム(デザインに必要なスキル)を入手していく形式にしました。コロナ禍で失われた、つながりを取り戻すプレイフルな環境づくりを意識しています！

兼高聖雄先生

放送学科



【先生の研究室のこだわり】

原則誰が入ってもいいようになっています。部屋みたいな。置いてある本は、学生の興味や研究に合わせる感じで、アイドルからニュースまで、本当にバラバラです。あとは、学生が持ち込むものも多いです。ゼミで芸祭に出ているので、それ関連のものが多いですね。

【先生の研究】

メディアコミュニケーション、放送・広告を社会心理学的に研究するのが専門です。「メディア文化論」を全般的に研究しています。

【オンライン授業について】

対面とハイブリッドで行っています。フルにオンラインだった時は、教科書のように読んだだけでもわかってもらえる教材を作っていました。学生さんのリアクションを次の授業で活かすよう、文章化して紹介し、見えるようにしていました。

芸術教養科目 加藤亮介先生



【先生の研究室のこだわり】

研究室では「オンライン授業」から「何もしない」までを行います。なのでオン・オフどちらでも過ごしやすいようにものは少なめです。少ないといつつ、陶芸の街で育ったので「好きな抹茶茶碗」や最近の趣味である自作のカーモデルなどをかざっており、ぼーっと眺めていたりします。

【先生の研究】

主に「教育工学」という分野で、ICT教育についてや、特に、最近では、心理学の研究仲間と一緒に「オンライン授業と心理の関係」を研究しています。

【オンライン授業について】

なるべく良い機材を使い、言語、非言語が豊かに伝わるように心がけています。そして、何より、オンライン上での皆での対話を一番大切にしています。例えば、芸術作品を一方向的に解説するだけでなく、議論しながら皆で考察を深めるのはとても良い時間です。

#春から日藝学部長



川上 央 新学部長 インタビュー

これからの日藝をどうしていきたいか、日藝生に求めることは何かをお聞かせください。

僕も日藝出身なんですが、入学した理由の一つが、本当に自由でとことん創作活動ができること。しかも他の大学と違って、教員も創作活動にのめり込んでいる人が多い。学生がそういう教員と一緒に創作活動ができるのが面白いということで来たわけです。しかし最近はずびの標準化というか、比較的大学全体が同じようなカリキュラムになりつつある。英語力を伸ばせとか、就活をしっかりとやるとか、それはそれで大事なことなんですけど、あまりそれに注力してしまうと芸術学部の個性というものがなくなってしまう。昔のようにとは言えませんが、学生が芸術活動やものを作ることに没頭できるような環境にしたいです。教員も忙しいですけど、できるだけ負担を減らして、好きなことを好きなだけ追求できるような環境作りをしていきたい。これは学部長になろうと思ったモチベーションでもあります。

次に日藝生に求めることですが、日藝生はアートの専門家。アートと言っても大衆的なもの、あるいは彫刻や絵画、音楽ではクラシックもありポピュラーもありという、そういう様々なものが融合していると思います。今までの芸術は割と海外の影響を受けていて、音楽なんて特に、ヨーロッパを真似てヨーロッパの人たちに一流として認められるようなところを目指していたと思うんですけど、もはやそこを目指してもしようがないと考えています。日本の芸術には日本独特の良さや個性がある。これはいわゆる日本舞踊や古典芸能だけではなく、日本の文化や風土などに根付いた芸術一般のことです。そのような個性を持った芸術を発信していくことが、今後グローバルに活躍していく日藝生を育てるのに重要だと思っています。グローバルの意識と言っても、英語ができるとか、外資系の企業に就職するとかではなく、作品が日本独特の感性や個性を持っていて、それを国際的にみんなが求めていくというような学生を育てていきたいです。学生の海外志向というのも重要ですが、やはり日本のルーツに根ざした、日本人じゃないとできないような活動をする、グローバリゼーションを見つけていってほしいと考えています。

コロナ禍におけるイベントについて、どのように感じたり考えたりしましたか？

イベントはやってみよう、というスタンスです。例えば音楽のイベントだったら主流になるだろうオンライン配信でいかにちゃんとしたものを届けられるかを実験するという建前でライブをやるとか。2020年頃は、色々な制限がある中で試行錯誤しながらイベントを開催しました。感染状況を含め、感染のリスクについてちゃんと調べることで対策もとれますし、それなりにできるんですよ。今後も徐々に新しいことにチャレンジしていくポリシーでいます。学生たちもそういった活動の中で何が危ないか、何ができるのかという基準を自己判断できる能力をつけないといけない。リスクイ時代だからこそ、咄嗟の判断をしないとけないことがたくさんあるじゃないですか。やっぱりそこがポイントで、いくら良い作品を作って、優れた能力を培っても、あっという間に判断を間違えて死んでしまったら意味がない。芸術以前にそういう能力をつけることも大事にしています。「強く生きる」ということです。

これからやっていきたいこととしては、やっぱり多くのイベントを開催することですね。人間同士のコミュニケーションを大切にしたいというのが一般的なお話だと思うんですけど、コミュニケーションは別に対面だけの話ではなくて、時間を共有することと、相手を知ることだと考えています。インタビューもオンラインでやるのと、対面でやるのとでは後に残る感覚が違いますよね。それってすごく重要なこと。イベントをやると、知らない人同士がコミュニケーションを取れる可能性が出てくるわけじゃないですか。それから僕は日本の伝統の一番のポイントは季節だと思っているので、季節の感覚を大事にして、その時にみんなで集まる、集まれる機会を与えることが大事だと思っています。

コロナ禍でも先生はこれまで数々のイベントを行なっていますが、どのように学生とやりとりをしていたんですか？

情報音楽の学生たちとは、コロナの時はほとんどオンラインで繋がっていました。イベントに関しては、僕が焚き付けるといよりはSNSなどでの文字のやりとりやZoomなど、普段のコミュニケーションの中で「何かやりたいよね」「学校ガラガラだからなんでもできるよね」という話になって、「じゃあ、あれをやってみよう」というような感じで企画が動き出す感じです。企画の発案や内容を考えるのは全て学生ですが、その方向性や調整は僕がやっています。ただ単に自分たちが楽しければいいという話ではないので、それをもう少し社会的な意義に結びつけて、ディスカッションしながら形にしていきます。あとは全て手作りということ、外注はしないことというのがこだわりですね。コラボレーション作業では一通りのプロセスを経験することが重要だと思っていて、当然仕事の量が大きくなれば誰かに頼まなくてはいけなくなりますけど、誰かに頼むにしても自分でプロセスがわかっていないと、めちゃくちゃな要求を出してしまう。そういうプロデューサーはダメじゃないですか。だから、一通り全てゼロから自分でやるということがとても大事だし、それこそクリエイティビティの基本的なことだと考えています。

卒業する皆さんは、2年生と3年生という大学生活の濃い時期がコロナ禍で大変な代でした。しかし、コロナ明けの新卒第一グループになってくるので、これからの世の中をどう引っ張っていくか、特に日本のエンターテインメントをどれくらい引っ張ってくれるのかというところが皆さんにかかっています。ぜひ日藝卒業生として、アフターコロナのエンターテインメントをまたさらに盛り上げる希望になってくれたらいいな。頑張ってください。

次に新入生ですが、高校生の時に新型コロナの流行によって世の中がガラッと変わってしまい、それまでの人たちが過ごしてきた高校時代とは別の苦労をしているわけですよね。でもオンラインもそんなに悪いことばかりじゃなくて、オンライン上で漫画を読んだり映画を観たり、あるいは小説を書いたりして、芸術が本当に面白いと思って日藝に入学してくる人たちも多いんじゃないでしょうか。それらは色々な意味で今後パフォーマンスとして出てくると思うので、逆にチャンスかなと。今まであったプラットフォームが崩れていっているじゃないですか。でもそれは逆にいえばチャンスが非常に多くて、自分の能力とアイデア次第でいくらでも世の中に出られる、作品をアピールできるチャンスが転がっているということ。しかもデジタル化が進んで、気軽に創作や発表ができるようになっているので、そういう面で自分の創作能力をどんどん外にアピールしてってもらえると良いですね。

卒業生と、これから入学してくる新入生にメッセージをお願いします。

取材：鶴岡、畑中
構成：鶴岡